

## ■ 修士論文要旨

# 循環型社会を目指す企業経営のあり方

## － 企業が環境との共生を意識する途 －

An Idea for Environmental Management for Driving Circulating Society

－ Way for Corporation Considering Symbiosis with Environment －

神奈川大学大学院 経営学研究科  
国際経営専攻 博士前期課程

史 磊

SHI LEI

## ■ キーワード

循環型社会、環境経営、共生、外部不経済、地球環境問題、企業社会的責任、3R

産業革命以降、企業は、大量生産・大量消費、大量廃棄という経済システムのもとで、自然資源を利用し、製品やサービスを製造、販売し、社会に提供してきたことによって、経済的目的のみを追求してきた。その一方、環境への配慮があまりなかった。そのため、急速な経済発展にともない、地球環境問題が深刻化になってきた。結果として、地球温暖化やオゾン層破壊、海洋汚染や有機廃棄物の越境移動、熱帯林と野生動物の減少や砂漠化、および酸性雨などの環境問題が、地球規模まで広がって人類社会に大きな影響を及ぼしつつある。世界の国々からこれらの環境問題に対する関心がますます高まっている。

これまで廃棄物が大量に増大する一途だったので、社会システムがまったく循環システムになっていない。したがって、大量生産・大量消費・大量廃棄という社会はそもそも持続不可能な経済構造特性をもつといえる。このような問題に対して、循環型社会の構築という新しい理念が主張されるようになってきた。そして、経済活動の主体

である企業側は、「環境との共生」を念頭において、環境に配慮しながら収益性追求を行う企業活動が、環境経営として提唱され、普及しつつある。

環境経営の具体的な内容となるのは、企業活動により環境に与える負荷の低減をめぐる企業理念から、ISO14001や環境会計など環境マネジメントツールの導入、また環境保全に関する社会とのコミュニケーションの実施まで、極めて広範囲にわたっている。

そして、新しい社会システムに向けて、企業が環境規制への受身的な対応にとどまらず、本業の環境に与える負荷を十分に認識したうえで、自主的に環境方針や環境目標を設定し、管理技術システムを導入することなどにより、環境問題に積極的に取り組むことがこれからの課題である。環境保全と経済的収益性の追求を同時に達成するために、企業は長期的な視点に立ってこの課題を探究することが求められる。

本論では、このような現状を考慮して環境経営をより具体的なものとするために、循環型社会の

構築という視点から、環境経営の必要要件、これまで企業にとられてきた環境経営手法、およびこれから企業がさらにとるべき行動を示したものである。

本論の概要を示せば次の通りである。第1章では、まず、循環型社会と環境経営誕生と概念および背景を考察し、両者の関係を掘り下げることにする。第2章では、環境問題が企業に及ぼす影響と企業経営の変化、および環境問題がもたらす企業評価基準の変遷を概説し、循環型社会に向けた企業経営のあり方を考察する。第3章では、環境問題へ積極的に対応している模範的な企業を例としてあげ、一般企業が環境経営を行うにあたって不可欠だと思われる要件を示す。第4章では、企業が循環型社会に向けて、取るべき経営行動について提言し、残された今後の課題を検討する。

以上のように、循環型社会にむけた環境経営を明らかにすることが本論の目的である。そして、将来において環境経営、マーケティングおよび環境組織論などの各分野から、より深く研究することがこれからの研究課題であるように考えている。